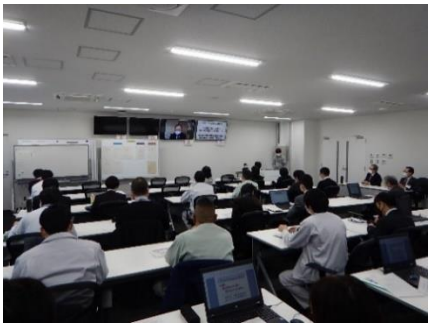
開催地名：奈良県桜井市	
開催日時	令和 3 年 12 月 23 日（木）　13:30～15:00
開催場所	昭島市役所 1 階市民ホール
語り部	鈴木秀光　　（宮城県気仙沼市）
参加者	市防災課職員、自主防災組織　約 80 人
開催経緯	地震、台風、記録的豪雨など様々な自然災害が日本全国で多発している。特に桜井市内には奈良盆地東縁断層帯が走り、最大震度 7 の地震が想定されているが、これまで大きな災害を経験したことがなく、災害時にどのような状況に陥るのか、どのような対応が求められるかなど、職員の災害に対する認識、意識が高いとは言えない状況である。
内容	（1）震災が起こる前の気仙沼市 私は東日本大震災当時、宮城県気仙沼市役所に勤務していた。気仙沼市は宮城県の北に位置し、住宅・工場・魚市場が一緒に並んだ水産業と観光中心の街である。 慶長の大津波、明治三陸津波、昭和三陸津波など昔から津波による被害に遭っており、学校でも日頃から防災教育に力を入れていた。宮城県沖地震は 30 年以内に 99%発生すると言われ、県の発表による浸水想定区域を標したハザードマップを各戸に配布した。しかし、5000 年に 1 度の想定外地震が発生。ハザードマップを安全マップとして誤解し、「着色されていないエリアだから私の家は大丈夫」と思って避難しなかった方は被災してしまったのではないかと危惧している。市役所は浸水区域から外れていたものの、すぐ目の前の道路を津波が襲い、がれきは散乱。城が水攻めされたような状態となり、籠城するしかなくなった。最悪を想定しきれていなかった甘さが招いた結果である。 （2）東日本大震災時の凄惨な状況 地震発生当時、気仙沼市の沿岸部では最初引き潮だったが、やがて押し波となって街に迫ってきた。想定以上の津波により、漁船用のオイルタンクは流されてしまった。あふれ出た重油はがれきに浸み込み燃えだすと、海を漂って街に火災が広がった。市役所に逃げ込んでくる人も大勢いた。市内全域は停電となり、皆暗闇の中で過ごした。翌日、がれきに埋め尽くされ救助に向かうのは困難な状況。自衛隊や警察、消防の方々は、がれきを素手で一つひとつ外に出していったが、人命やご遺体を守るという観点からすぐに取り掛かれなかった。市全体は地盤沈下により 70cm ほど沈み込ん

	だため、津波の水が抜けていかず、高潮でなくとも道路に海水が入ってくる状態だった。約 1300 人もの方がお亡くなりになった。被災家屋・被災世帯数は 1 万 5815 棟、これは全体の 40.9%にあたる。 　気仙沼市の場合、リアス式地形ということもあり平らな場所は少なく、ライフラインを設置できるような条件が少なかった。そのため、野球場や公園、小中学校の校庭などに仮設住宅を設置。生徒は校庭を使えず、部活動ができないまま卒業していったケースも多い。 （3）東日本大震災から得た大切な考え 　震災直後、全国の一部の方々が市役所まで来て物資を届けてくれた。徐々に置ききれない量になり、使わなくなった青果市場に置くようになっていった。次第に体育館や美術館なども大量の物資でいっぱいになる状態であった。途方もない量が届くため、仕分けや保管、配送の整理を行う体制が必要であることも覚えておいていただきたい。この教訓を踏まえて、当市では 2021 年 7 月に物資集積配送基地を建設。受入・搬出方向を分けて、渋滞防止ができるような施設をつくった。 　大事なのは、フェーズ 0 で何をするかだ。平成 23 年 3 月 10 日、あなたは何をするだろうか。今日は歴史的な大災害の前日かもしれない。自分を、家族を、大切な人を守るために、あなたなら何ができるだろうか。それは防災において非常に重要な考えである。 
開催地より	奈良盆地東縁断層帯は活断層の災害として非常に発生確率の高い状態となっている。扇状地につくられている街であるため、地震があれば揺れやすくなり、液状化しやすいことも想定している。 　今回の講演を通して、災害は止められなくても被害を最小限に食い止めて被災しないようにすることはできると感じた。準備しても準備し足りることはないと考え、日々防災に取り組んでいきたい。